

抗がん剤の副作用について No. 3

口内炎 ・ 下痢 ・ 便秘

口内炎

1 口内炎はどうしておこるのですか？

口内炎は一度起きてしまうと治療が大変であるにも関わらず、確実に予防できる方法が確立されていないのが現状です。口腔粘膜の細胞は7~14日間のサイクルで再生を繰り返していますが、抗がん剤によって粘膜の再生が阻害されると口内炎が生じます。

口内炎は疼痛を伴うだけでなく、食事が摂りにくくなったり、治療を継続する意欲を低下させます。

抗がん剤で口内炎の起る原因は、主に次の2つです。

- (1) 抗がん剤が、口腔粘膜へ直接に作用することにより起ります。
- (2) 白血球減少、免疫能低下による口腔内感染により二次的に起ります。

予防のためには、口腔内を清潔で適度の湿度に保つことが大切です。口腔内に異常が認められなくても、観察を常に行うことも必要です。

家庭でできる予防法としては

- (1) 口腔内を清潔に保ちましょう。
 - ・ う歯がある場合はできるだけ前もって治療をしておきましょう。
 - ・ ブラッシングとイソジンガーグル含嗽を励行しましょう。
- (2) 固い食物や極端に熱い食事を避けましょう。

2 口内炎に対する薬物療法

- (1) アズノール・イソジンガーグルによるうがい
- (2) ケナログ、デキササルチン等のステロイドを含む口腔用軟膏の塗布

3 口内炎を起こしやすい抗がん剤 () は商品名 フルオウラシル(5-Fu)、アクチマイシン(コスメゲン)、メトトレキサート(メトトレキサート)、ドキシルビシン(アドリアシン)、エトポシド(ラステット)、パクリタキセル(タキソール)、ピルルビン(ナベルピン)、ドセタキセル(タキテール)等



下痢

1 下痢はどうしておこるのですか？

腸粘膜の細胞も口腔粘膜と同様に活発な再生を繰り返しており、抗がん剤によって障害を受けやすく、腸管粘膜の障害が下痢の主な原因となります。一般的な対応としては、安静、腹部保温の他に整腸剤や下痢止めによる薬物療法があります。ひどい下痢の場合は脱水や電解質異常を引き起し生命の危険を伴うことがあるので主治医にご相談下さい。

抗がん剤で下痢の起る原因は、主に次の2つです。

- (1) 自律神経への刺激により腸管の蠕動運動が高まって起ります。
- (2) 抗がん剤の消化管粘膜への直接障害や白血球減少による腸管感染により起ります。

2 下痢に対する薬物療法

(1) ロペミン

腸管の蠕動運動を抑制したり、腸内の水分及び電解質の吸収を促進します。

(2) ビオスリー

ビオスリーの成分の乳酸菌は腸内常在菌の一種で乳酸を産生することで腸内を酸性化し病原菌の増殖を抑制します。結果として腸内細菌を正常化し下痢を軽減します。

(3) タンニン酸アルブミン

タンニン酸アルブミンは腸でタンニン酸となり膜をつくり腸を防御します。特に、イリテカン(カプト)による下痢の場合は主治医の指示に従って下さい。

3 下痢を起こしやすい抗がん剤

()は商品名

イリテカン(カプト)、フルオウラシル(5-Fu)、シタビン(キサイト N)、イダルビシン(イダマイシン)
メトキサート(メトクセート)、パクリタセル(タソール)、ドセタセル(タソテル)等

便秘

1 便秘はどうしておこるのですか？

便秘は自律神経障害の症状の一つです。腸がつまる怖い副作用を引き起したりすることがあるので、便秘ぐらいと油断せず、排便コントロールに心がけましょう。

抗がん剤で便秘の起る原因は主に次の4つです。

- (1) 抗がん剤により自律神経系が機能障害を受けることにより起ります。
- (2) 不安、緊張、ストレス等により起ります。
- (3) 生活行動の制限による運動不足により起ります。
- (4) 吐き気や食欲不振により、食物や水分が摂りにくくなることにより起ります。

2 便秘に対する薬物療法

(1) ラキソベロン、センノサイド

大腸を刺激して腸管の動きを活発にします。そのため腸管の運動が激しくなることで腹痛が起ることもあります。

(2) 酸化マグネシウム

腸管内容物のかさを増やし、その刺激で腸の運動を促進します。一部の抗菌剤等との飲み合わせがあるので使用時は医師の指示を守って下さい。

3 便秘を起こしやすい抗がん剤

()は商品名

ビンクリスチン(オノピン)、ピルルビン(パルビン)、ビンデシン(フィルデシン)、ビンブラスチン(エクザール)、等